

## 現代の「フェミナ・パーフェクタ」

—— フェイ・ウェルドン『魔女と呼ばれて』 ——

英 美由紀

In contemporary literary trend, the body is regarded as a social/cultural construction and is brought to the forefront in studies of gender, sexuality, race, and class. When viewed from the perspective of such studies, the recent surge of interest in women's concerns about their physical appearance—taking such forms as dieting, fashion, and cosmetics—is an attempt to explore the power relations between the genders.

The aim of this paper is to argue that the pursuit of beauty and the rise of plastic surgery as an extreme practice, both related to the female gender, reflect the asymmetrical position of the sexes in modern society. By surveying two theories that discuss women's bodies in the first section of the article, and also by examining Fay Weldon's *The Life and the Loves of a She-Devil* (1983) as a work exploring plastic surgery. In the following two sections, I conclude that what seems to be the heroine's active choice to undergo surgery is, in effect, formed under the strong influence of gender relations in society. I also find in the portrayal of the heroine that plastic surgery, although often discussed positively in the discourse of liberation, can cause substantial harm to women, both physically and mentally.

**キーワード：**身体、美容整形、フェイ・ウェルドン、『魔女と呼ばれて』、イギリス小説

---

フェミニズムを含む理論の発展を背景に、女性の身体は様々な領域で焦点化されてきた。セクシュアリティ、ジェンダー、民族・階級の問題、健康・医学の分野などはいずれもその例である。最近では特に身体の外見にまつわる研究への関心が高まり、各種の美容実践やファッション、また極めて現代的な事象として、ダイエットや摂食障害、美容整形なども考察の対象となっている。医療技術の向上にも支えられ、美容整形は現代では急速に一般化しつつある。「20世紀版の“<sup>フェミナ・パーフェクタ</sup>完全なる女性”」を創り出すために、整形による介入から免れている身体部位は理論的には存在せず、「女性は外科用ナイフを受け入れるよう、ますます社会化されている」(Morgan 2003, pp.168-9)とも言われる。<sup>1</sup>整形を含む美容はいまや一大産業として隆盛を誇っている。

このような需要の高まりはあくまで個人の美の追求に根ざしたものと捉えられがちだが、これをジェンダーと権力の関係から議論することも重要だろう。現代文化では、美の獲得は特に「女性的とジェンダー化され」ており (Gilman 1999, p.36)、上の引用に明らかなように、美容整形を受けるのも一般に女

性と想定されている。<sup>2</sup> また上述のような理論面での発展や社会状況を反映し、美容整形は文学、美術等の表象芸術の分野においても主題として取り上げられるようになってきているが、そこでも整形の対象として描かれているのはこれまでのところ女性である。このことは整形の興隆という事象を、社会の権力構造との関連を反映するものとして考察することの十分な根拠となるだろう。

美容整形を主題化した作品は文学から、映像やパフォーマンス・アートなどを含む美術、またコミックやテレビ番組などのポピュラーカルチャーの分野に至るまで幅広く挙げることができるが、本論ではそれを比較的早い時期に取り上げたフェイ・ウェルドンの小説『魔女と呼ばれて』(Fay Weldon *The Life and Loves of a She-Devil*, 1983) を考察の対象とする。この作品は整形を扱った代表的なもののひとつとしてこれまでも批評の俎上に載せられてきたが、その解釈は整形の捉え方の違いにより全く異なったものとなった。本論ではまず美容整形をめぐる理論の変遷を概観した後、異なるアプローチによる複数の解釈を比較検討しながら、作品を再読したい。そこでは手術を受けるに至る個人の選択がいかにかに社会の性のヒエラルキーのもとで、大きな矛盾をはらみながら形成されるかが浮かび上がる。と同時に最近一部には女性の解放の契機とみなす意見さえ現れ始めた美容整形の、女性の心身にもたらし得る過酷な状況にも注意を喚起することができるだろう。

## 1. 美容整形をめぐる——理論的側面

女性の身体が中心的な課題とされる領域の例を複数挙げ、そのひとつが美容整形を含む身体の外見にまつわる研究であると上に述べたが、このような問題を論じる枠組は、理論的な見地、方法論などにより必ずしも一様ではない。ここでは整形を扱った作品を読む前に、これまでに提出された理論を概観したい。

### (1) 支配・抑圧の対象としての女性の身体

長い間個別的、生物学的なもののみ扱われていた女性の身体は、フェミニズムの文脈においてきわめて政治的な問題として理解されるようになった。まず家父長制という男性支配の構造を理論的基盤に、女性の身体はそこで男性権力が操作・抑圧する対象として位置づけられた。女性の容姿に関しても、個別の抑圧経験をもたらすものとしての体系が模索され、ことさらに美や若さを要請する文化的なシステムが告発されることになった。つまり不断の、また時に苦痛をともなう女性の各種の美容実践は美という構造的・文化的抑圧システムに連結され、それがジェンダーに根ざした権力関係の生産・維持に中心的な役割を果たすと捉えられるようになったのである。ウェンディ・チャプキス(Wendy Chapkis)による美の論考は、このような枠組を用いた研究の一例である。

美のように個人的な問題を政治課題化したことの意味は大きかったと言えるが、上からの直接的抑圧という構図は、その後ミシェル・フーコー(Michael Foucault)により新たな権力形態のあり方が提示されると、むしろ女性と規範相互の共謀関係として論じられるようになった。つまり日常的な美容行為も規範に共謀する権力実践のプロセスとして捉えられるようになったわけである。このようなアプローチを採る研究者の一人にスーザン・ボルドー(Susan Bordo)の名が挙げられる。彼女は女性の身体をジェンダーの文化的記述が読めるテキストと位置づけ、そこに西欧文化における心身二元論、女らしき等の言説が作用していることを洞察した。またそれらが現代の女性の身体的な現象に結びついている例

として、ダイエット、摂食障害、広場恐怖等に特に関心を寄せ、時に規範化作用としてのメディアの分析も織り交ぜながら議論を展開した。

それまでは美という抑圧的な支配やそのスタンダードを廃し、ありのままの身体を受け入れることこそが有効な手立てとして、支配からの解放に楽観的な立場がとられたのに対し、ここでは女性が自身を抑圧するシステムに埋め込まれ、それと共謀する他ない存在とされるため、その行為・選択等の可能性には懐疑的にならざるを得ない。したがって美のシステムの打破、及びそこから女性の解放はおのずと限界を持つものとして捉えられることにもなった。このような研究の成果は、女性の身体変形の議論にも基盤を与えた。女性の美容整形を論じたキャスリン・ポルティ・モーガン(Kathryn Pauly Morgan)は、その選択が規範への順応に過ぎず、また結果として支配的言説の強化につながることを懸念して、整形を道徳的・政治的に許容されるべきではないとした。

## (2) 行為体・転覆の概念の導入

女性や整形手術の患者を抑圧的な社会構造における搾取の犠牲者と位置づける上のような見方から必然的に生じる抵抗不可能性の修正の試みとして、新たに行為体や転覆の概念を導入する考え方が現れた。すなわち女性の(可変的)身体を行為、抵抗、反逆の場とし、それを通じてジェンダー規範を転覆させる可能性を見出そうとする立場である。

このようなアプローチから、特に美容整形に関して積極的な発言を行なっているのがキャシー・デイヴィス(Kathy Davis)である。彼女は女性の美の探究・実践を引き続き両性間の非対称な権力関係に起因する文化的・社会的抑圧とみなす一方、その理論的枠組みにおいては批判の対象とされてきた整形を、抑圧状況における能動的・認識的行為と意味づけ、さらにアイデンティティの再交渉の契機ともなり得るものとする。そこには整形手術を受けた者を行為体とみなし、彼らの生きた身体経験を重視、整形を主体形成の契機と捉える姿勢がうかがえる。理論的土台としては、個人の主体的解釈を最重要視する解釈社会学(interpretative sociology)の方法に加え、現象学の流れを汲むアイリス・マリオン・ヤング(Iris Marion Young)、ドロシー・スミス(Dorothy Smith)らの提出した諸概念を援用している。整形そのものを扱っているのではないが、ヤングは身体との相互作用により形成されるとする「身体化された主体」や、「身体の美的尺度」、スミスは美に関するテクストを処理する女性の能力に行為体を見出す「女性性を行う」、「秘密の行為体」等の概念を唱えている。またこれらの理論に加え、デイヴィスは整形手術を実施する病院での診察のあり方、女性患者への聞き取りなど実地調査にも重点を置いている。

女性の身体を支配・抑圧の対象とする(1)に述べた立場、とりわけ権力との共謀関係という視点を導入したフーコー以降の理解をデイヴィスは「文化の麻薬」と呼び、それが女性の能動的・認識的な身体への関与を曖昧にし、その生きた身体との関係を消失させることで、二元論を強化する結果につながるとして批判している。また整形が規範に共謀し、従属状態の再生産に与するだけの意味しか持たないという考え方は、それが解決となる可能性を欠いている点も指摘する。整形という選択を規範への順応とするモーガンの論に対しては、手術を受けた女性達の決断を性急、安易に否定するのみで、彼らの苦痛の理解を不可能にしているとし、整形の拒絶を唯一のフェミニスト的態度とするその主張に異議を申し立てている。またモーガンが提示する「整形のユートピア的解答」についても、その魅力とともに限界も指摘し、研究の方法論自体も強く批判している。

いずれのアプローチも長短を持つことを認めたい。デイヴィス自身はみずからの欠点として構造的パターンへの注意を留保している点などを挙げている。確かにモーガンとは、整形批判を手放さない点は同じでも、一般的構造と個々の経験のいずれを重視するかにより必然的な相違が生じる。また各々が議論の前提とする患者層の差も、整形の可否に関する見解の対立を生む一因となっていよう。<sup>3</sup> 以上のような理論的動向を踏まえ、次項に取り上げる作品では、美容整形がいずれの意味を与えられた表象として描かれているのかを見ていきたい。

## 2. フェイ・ウェルドン『魔女と呼ばれて』に見る美容整形の「選択」の矛盾

『魔女と呼ばれて』は1980年代に発表されたフェイ・ウェルドンの長編小説第9作であり、アメリカの都市郊外を舞台に、一人の主婦が美容整形に乗り出す顛末とその後を、ファンタジーの形式で描いたものである。主人公のルース・パッチェット (Ruth Patchett) は、有能な会計士の夫ボッボ (Bobbo) が顧客のメアリ・フィッシャー (Mary Fisher) と愛人関係にあることを知り、二人に対する復讐を決意する。家庭を棄て、まず老人ホームの住み込みの手伝いとして社会に歩を踏み出すと、続いて経理や簿記の知識を習得し、女性のための人材派遣会社を設立する。そこで成功を収め、莫大な資金を手にしたルースは、ビジネスの世界からさらに宗教や法曹界にも入り込み、あらゆる手段を駆使して夫を犯罪者に仕立て上げ、有罪宣告を下させる。また人気ロマンス作家であったメアリに自分とボッボとの間の子供を押しつけるなどして彼女の執筆を阻み、その地位から引き摺り下ろすことにも成功する。一方でルースは仕事で得た資金を元手に、185センチ95キロ、みずから「人生というくじ引きで“はずれ”を引き当てた」(ウェルドン 1993, p.12) と表現するその容姿を、「美人」で「小柄で華奢」(8) なメアリと寸分違わぬものに改造するのである。<sup>4</sup> 数年を費やして全身にわたる大がかりな整形手術を施し、すでに亡きメアリに成り代わったルースは、犯罪者に仕立てられ、精神に破綻もきたしていたボッボを釈放させると、再びともに暮らし始める。

以上のようなあらすじを持つこの作品には、前項で概観した理論的見地を反映し、これまでに異なった解釈が提出されている。一方は主人公の身体に構造的な性の抑圧を読み取るもの、もう一方はさらにその転覆の可能性を見出そうとするものである。後者は前項にも挙げたデイヴィスによるものだが、そこに示される整形の主体的・認識的選択という捉え方を、ここではモーガンの指摘する整形選択のはらむ矛盾に照らし、再検討したい。それにより美容整形をエンパワーメントの契機と捉えるデイヴィスの主張を、再考の余地を残すものとして提示し直すことができると思われるためである。

『魔女と呼ばれて』についてなされていた従来の解釈は、社会における非対称なジェンダー関係を背景に、男性の幻想を女性主人公の身体上に具現した、いわゆるピグマリオン・ファンタジーというものである (Faulks 1998, p.48)。実際作品中でも、「彼 [整形医] は彼女 [ルース] のピグマリオンだ」(350) と述べられており、ここに主人公は、医師や夫に代表される男性に形作られた〈犠牲者としての女性〉の位置に留め置かれることになる。そもそもこの作品はひとりの男性をめぐって二人の女性が争いを繰り広げる構図において、その二人の容姿が極端に異なると設定することで、社会的な地位や経済状況、愛情関係と結びつく容姿こそが、女性を決定的に序列づけるものであることを端的に浮かび上がらせるよう意図している。主人公も自身の知恵と行動力を武器に社会的な成功は収めるものの、夫の愛情を愛

人から奪回することがかなわないことから、美容整形という手段に訴えることになる。一般に女性が外科的手続きに従うのは、「他の権力形態やエンパワーメントへのアクセスが余りに制限されすぎ、整形が見せかけの自己決定を経験できる主要な領域となっているため」(Morgan 2003, p.177) とされるが、「世の中を変えることはできないのだから、私自身を変えるのだ」(90、330) という主人公の決意の言も、容姿を権力獲得の手段として、規範に共謀せざるを得ない女性の状況を端的に表したものと理解できよう。

これに対し整形手術を受ける女性達は男性(社会)に一方向的に形作られるのではなく、みずから「自身のピグマリオンに」なりたいたいのだとするのが、デイヴィスの意見である(Davis 1997, p.175)。「文化の麻薬の終焉」と名づけられた『魔女と呼ばれて』の作品評で、主人公の行為を自身の制御や理解を超えた社会的な力に盲目にされた文化の麻薬という観点から捉えるのではなく、その行為体も考慮に入れるべきだと主張する(Davis 1995, p.66)。つまり主人公の選択の能動性・認識性に重点を置いた見方であり、それは作品のサブテキストにも顕著に見て取れるとする。この作品はアンデルセンの『人魚姫』を下敷きとするが、両作品とも女性が美のシステムに服従し、男性の愛を勝ち得るために多大の苦痛を進んで受け入れる物語である一方、女性の企みと誤魔化しというサブテキストが隠されてもいるというのである。デイヴィスによれば、主人公は決して整形が完全な解決と考えているわけではなく、構造的なジェンダー間の不平等を排除できない現状における窮余の策として、「少なくとも承知のうえで……選択した」のであり、人魚姫と同様、「ルールを知り、そのルールでゲームをした」のだとする(Davis 1995, p.66)。そうしてみれば先に挙げた主人公の言葉、「世の中を変えることはできないのだから、私自身を変えるのだ」(90、330)も、限られた状況下における、ジレンマに満ちた、しかし「少なくとも承知のうえでの選択」(Davis 1995, p.66)と、その意味を修正する必要が生じることになる。

しかし美容整形を「選択」と言う場合、そこには矛盾が付随することも明らかにする必要があるだろう。整形を論じた著作の中でモーガンはまず、一見患者自身の選択と見えるものも実際には順応に過ぎず、美を競うために手術を受けるような女性達は「順応という選択」(Morgan 2003, p.172)をしているに過ぎないのだと指摘する。<sup>5</sup> メアリと全く同じ容姿を実現した主人公は作品中で、「平凡すぎ」(356)、「まるきり他の人と同じ」(366)と評される。そもそも「典型的な美人」(327)、「均整が取れすぎ、完全すぎる。……どんな女でもないことによって、彼女は理想の女たり得ている」(257)と言われるメアリの容姿は、男性の理想の具現と言ってもよく、彼女自身が整形を受けている可能性さえ、完全には否定しきれない。だとするなら、この作品が「女性を、当惑された犠牲者の位置に貶めることなく、美の規範を傷つける図を提供している」(Davis 1995, p.66)とするデイヴィスの評価に反し、ここに見られるのはむしろ果てしない規範の再生産ということになる。つまり美容整形における「容姿の規格化」こそが問題とされているということである。さらにモーガンは、パリス神話を引くジョン・バージャー(John Berger)の論を引き、女性の美的想像の中には、実際の、または仮想の男性が住みついていることから、美の規範への従属は特に「強制的異性愛という規範へのより深い順応」(Morgan 2003, pp.172-3)を示唆するものであることも明らかにしている。ウェルドン作品には女性同性愛者が頻出し、それが社会の異性愛プロットの形や意味を改め、弱体化させる役割を果たしていると言われるが、この作品で主人公の同性愛の可能性が一旦示唆されながらも棄却され、異性愛のプロットに取って代わられる(Smith 2000, pp.125-6)のは、主人公の整形の選択を異性愛への順応と解釈することを可能にするものである。

そもそも選択という語自体、複雑な性質をはらむものであることをモーガンは指摘している。美容整形は他の医療介入とは異なる選択的なものであり、その患者達は理性的選択者と捉えられるが、これらの場合の「選択」という語は「選択の欠如というイデオロギー的なカムフラージュを促進する魅力的な役割を果たす」(Morgan 2003, p.174) ものであるとする。<sup>6</sup>つまり男性主導の社会で権力にアクセスしようとする限り、その選択は実質的に選択の余地のない「強制的任意性」(Morgan 2003, p.174) とも呼ぶべき性質を内包すると言うのである。またイデオロギー的な選択消去のダイナミクスとして、技術を通じての完成の達成へのプレッシャーや女性の身体の病理化があり、これらが強制として女性の選択に影響しているにもかかわらず、「選択、充足、解放の言語でカムフラージュされる」ことも明らかにしている (Morgan 2003, p.175)。

選択という概念のさらなる矛盾として、モーガンは身体の「植民地化への解放」の問題も挙げている (Morgan 2003, p.173)。美の達成には身体の意図的な搾取と変身がともなうが、ここで女性の身体は搾取されるべき対象とみなされること、また整形手術を受ける患者は所与のものに抗議し、そこからの解放を求めているようでいて、「植民地化の権力形態に、より傷つきやすくなる危険に瀕している」ことに警告が発せられるべきだと言うのである。実際作品に示唆されるのも、「労働市場、結婚市場で不利に働いている」(223) 外見の不平等の積極的な解消に乗り出したものの、結局は自身の身体を譲り渡すことになった主人公にもたらされる複雑な状況である。作品を結ぶ一節の、「私は身長一八五センチの、足に縫いひだを入れた女」(390) というくだりはそれを端的に示す一例である。主人公がこの時点ですでに脚を切り詰め身長も低くなっていることを考えれば、この文章は前後半で相矛盾しているのだが、外見と自己の身体認識の間のこの著しい齟齬は、身体を規範に順応させるべき客体とみなすことで引き起こされる分裂・疎外の一面を表すものとも解釈されよう。そうだとすればこれは、整形手術を受ける者の目的がアイデンティティの調整にあり、手術の結果、外見と自己定義のかい離を軽減できたとするデイヴィスの報告とは相反する様相と言える (Davis 1997, p.175)。上の一節は手術にともなう身体的な負担に加え、その後に引き受けるべき精神的負担の重さを我々に印象づける箇所と言って良いだろう。さらにこの作品で看過されてはならないのは、主人公が敢えて他人と全く同じ容姿になるという皮肉な設定であり、そこに形成される主体が矛盾をはらんだものになると予想されることである。しかしこの点に関する言及を避け、主人公が単に「美しい女性に」(Davis 1995, p.65) 変身したとのみ記述することで、整形という選択を規範やジェンダー関係の転覆をもたらす可能性を持つものとして肯定しようとするデイヴィスには、この作品が提示する設定を敢えて単純化し、整形の負の側面を直視することを避けようとする傾向を指摘できるのではないだろうか。

美容整形における選択が実質的には選択とは程遠い、危険にも満ちたものであることを、モーガンの論に沿い上に見てきた。整形という選択は解放のレトリックで語られようとも、それは現実には「支配的な文化に影響された者のための変身」(Morgan 2003, p.173) であるとされる。つまり整形患者たちが行なう変身はあくまでも支配者側のためのものであり、それは結果的に自身を支配的な言説に再回収させることにもつながっているのである。作品の主人公を大がかりな手術に駆り立てたのは、「肉体の中に捕われ」ている (9) という思いだったわけだが、当初の案に反し、整形は彼女を新たに肉体に封じ込める契機となったのである。

### 3. 美容整形のはらむ問題——作品の構成と結<sup>エンディング</sup>末の考察から

美容整形を「男女間の権力闘争における手段」としたデイヴィスの見方に従えば、『魔女と呼ばれて』のルースは「勝利を収める、つまりは性の闘争において上位に抜け出る女性主人公」(Davis 1995, p.66)ということになる。彼女がポッポとの関係において以前より優位な位置に立ち、より支配力を強めたことは否定できず、ここに整形は権力の獲得や解放の言説の中で肯定的に捉えられ、この作品自体ある種のサクセス・ストーリーとさえなり得る。しかし前項に見たモーガンの指摘にも見られるように、整形という主人公の選択は、必ずしも可能性だけをもたらすものとして一面的に捉えられるべきでないことも明らかである。ここではさらに作品の構成と結末を検証することにより、デイヴィスの解釈に疑問を投げかけるとともに、美容整形の諸問題を論じたい。

この作品が美容整形を女性の解放の契機として描いているのではないことは、その構成からたどることが可能である。作品の前半で主人公は性別役割分業を基盤にした近代的家族というシステムから自立し、特別な能力や技能も持たない状態からビジネスの世界での成功へと駆け上がる。さらには裁判官や聖職者など、「男が締め出している……権力の世界」(189)にも入り込み、そこで得た知識をもとに夫への復讐を画策する。この経緯が快進撃として読者に大いに痛快感をもたらすのは、彼女が自身を抑圧してきた社会の権力機構の欺瞞を暴き、時にそれを根底から揺るがすからである。しかし巨大な資金を手にした後、彼女が着手するのが美容整形であることが明らかになると、作品のトーンは一転複雑な様相を帯びてくる。全身にわたる手術は四肢の短縮さえ含むため、数年にわたり断続的になされねばならず、施術の内容や後遺症の描写は凄惨を極める。前項に述べた通り精神に与える影響も深刻で、これらが作品に暗い影を落とすようになる。

このようなトーンの変化は、先にこの作品の異性愛への傾倒を示したスミスの指摘するところでもある。スミスによれば、同性愛関係にあった女性看護師との別離を機に、主人公の性格づけには変化が生じるという。あらゆる否定的な家父長的資質の具現である夫への復讐が読者の共感を誘うのに対し、ロマンスという虚構を通じた異性愛的な自己奴隷化の具現であるメアリへの変身の欲望を契機に、主人公は「自己破壊的な様相」を呈するようになるというのである(Smith 2000, pp.139-40)。そして彼女が自身の認識を超えたところでそのような自滅の道を歩む引き金となるのが整形手術に他ならないことに読者も物語の展開とともに否応なく気づかされるよう、この作品は構成されているのである。

当初、「私を縛っている鎖、習慣や習わしや性的渴望という鎖を私は捨てる」(258)として、「女から、女に非ざる者への変身」(259)を果たすとした主人公の誓いは、家父長的な価値基準やキリスト教に基づく倫理観を捨て去り、神に代わり自己の再創造にさえ越権する女悪魔になる決意を述べたものと理解できる。しかし整形手術を受けることで規範を再生産し、異性愛への順応を露呈した彼女の姿は、まさしく異性愛の文脈における「女」そのものへの回帰だったということにもなる。つまり彼女はデイヴィスの言うような「性の闘争において上位に抜け出る女性主人公」(Davis 1995, p.66)ではなく、むしろ異性愛を基盤とした権力構造内から決して逃れることのできない一女性に過ぎなかったのである。それはルースという名が、理想的な嫁であった旧約聖書のルツ、つまり家父長のもとに形成される家族における駒を想起させることとも無縁ではないだろう。そして異性愛における女への再回収の契機となったのは、言うまでもなく美容整形なのである。

主人公がこうして異性愛の枠組に再び取り込まれることになった要因のひとつに、美というものの二面的な性質を挙げることができよう。美を政治性の観点から分析したロビン・トルマック・ラコフ (Robin Tolmack Lakoff) らは、それが「女性の持つ政治的道具……であるという点でも政治的である」とする。美とはある種の力でありながら、「女性たちは容貌という圧力……によって管理され、同時に権力を抑えられ」てもいる、アンビヴァレントな性質を持つと言うのである。つまり美とはそもそもその承認を、見る人に依存する性質のものであり、しかもその判断が社会において権力を有する者たちに委ねられる以上、客体としての位置に留まらざるを得ないという意味で、所詮「弱者の力」に過ぎないということである (Lakoff and Scherr 1984, p.20)。また美とは一旦獲得されたところで、それを長期にわたって保持することのできない移ろいやすい性質のものである。美をそなえた女性達は美のこのような性質に依存していることを自ずと表明してしまうため、「そのような女性たちを私たちは本気に受け取らない」のみならず、美を持つ女性自身さえ、「自分たちを本気に受け取らない」 (Lakoff and Scherr 1984, p.154) ということになる。

さらにラコフらはこの、美が力であるという逆説に人を引きずり込むのが恋愛物語であることも指摘しており (Lakoff and Scherr 1984, p.20)、それがこの作品で主人公を美や異性愛のシステムに取り込む遠因として用いられている点も見逃すことはできない。<sup>7</sup> メアリがロマンス作家であり、主人公もかつてその作品の読者であったという設定は、異性愛の物語を通じ美の言説がいかに巧妙に組織化されるか、またそうした物語の消費ばかりでなく生産までも女性が担っている皮肉を描くものである。しかしこのようなロマンスの言説自体、じつは虚構に過ぎないことは、メアリがボッポとの関係を深めるにつれ執筆が困難になるという設定にも示唆される。女性が隷属状態に置かれる異性愛構造の現実を身をもって知るにつれ、自身の手がけてきたロマンスがいかに空疎なものであったかに直面せざるを得なかったためである。また、「[メアリ・フィッシャーは] 暗闇に新しい光線を投げかけた。それは人を欺く光だ」 (292) と言うように、主人公自身も反面の真実でしかない物語を世に送り出すことの罪や、異性愛、結婚という制度そのものへの懐疑を次第に深めていく。

そして、主人公がメアリの死後その作風を模した作品を著し、それを出版社に受け入れられ、「彼女も別にそうたいした女じゃなかったのだ」 (390) と感想をもらすに至り、作者と読者として階層づけられていたかに見えた主人公とメアリとの関係は、完全に瓦解する。ロマンス小説の虚構的な性質が明白となり、二人はともにそのロマンスの言説の犠牲者であることが判明したためである。またロマンス小説のヒロインに不可欠な要素であった美にしても、これまでに見てきたように、所詮、男性社会の理想に基づいた実現困難な虚構に過ぎなかった。美とそれによってもたらされる社会的な地位、経済状況、愛情関係を基準に、女性間に存在するように思われた序列化も結局あってなきがごときものであることに思い至った時、自身とメア리를「有(も)てる人……有たざる人」(7、8)とした当初の位置づけは、一切無効化されたことになる。そうなってみれば、そもそも主人公の整形の動機であったメアリへの復讐自体が意味合いを欠いた虚しいものになることは避けられず、しかしそれが明らかになるのはようやくこの物語の結末、整形手術を含む長い復讐劇を終えた後においてなのである。作品を締めくくると、「道化まつりの夢のあと、鳴りやんで見れば風ばかり」(390)は、物語を通じて巧妙に刷り込まれた美の力を、現実には強制であるとも思い至らず、選択というまやかしに惑わされ追求したという事実の虚ろさが、最後にあからさまになる皮肉な状況を表している。主人公が「社会的・経済的力関係から自由になりながら、その自由を経済的抑圧と同じくらい効果的に彼女を圧するロマンス神話の追求に使ってし

まうヒロイン」(Waugh 1989, p.190) と評されるのもその故である。

このような結末において、主人公の変身を「醜いアヒルの子」(16) からの解放と手放しで讃えることは困難であり、むしろ一見打開策であるかに見えた整形が、従来の社会構造の再強化に帰結したという意味で、この作品は「美容整形の暗いディストピア」(Gilman 1999, p.317) を描いたものとする方が妥当であろう。<sup>8</sup> 整形が「解決」となるのも、ジェンダー間の権力関係が逆転するのも、デイヴィス自身も控えめに認めているように、「せいぜい一時的なもの」に過ぎないのである (Davis 1995, pp.65-66)。

美を前提にした女性のアイデンティティを強要する「美の神話」の概念を打ち立てたナオミ・ウルフ (Naomi Wolf) は、社会は女性を長らく病気と定義づけてきたとしたスーザン・ソントグ (Susan Sontag) の指摘と同様、現代の「美容整形時代」も、社会が自らの統制に従わせるための「文化の陰謀」、「社会的虚構」であると断じた (Wolf 1991, pp.15, 220)。つまり、いまや「規範になりつつある」(Morgan 2003, p.165) とされる美容整形の隆盛という事象も、けっして単なる個人的な欲望・実践の集積ではあり得ず、ジェンダーに基づいた権力の構図がつくりだしている現象ということである。<sup>9</sup> そして個人が文化として強制される身体規範に順応することは、結果として性の権力関係を再形成するとともに、その構造的な歪みが個々の女性の心身に及ぼす重大な負担をも引き受けねばならないことを意味することは、作品に如実に描かれていた通りである。

文学作品は、そこに描かれた身体のアデオロギーの描写を通し、当時の人々の考える女らしさを示す点で意義深いと考えられる。この作品が発表された1980年代を、女性が自立的な存在として扱われる反面、出産、育児等には依然として責任を負わされる時代だったと総括するなら (Evans 1997, pp.30-32)、ここに論じた作品の主人公の身体はまさしく当時の女性の置かれた状況を物語っていると言えよう。つまり作品前半では制度的な下地がある程度整っているなかで社会進出の快進撃を達成するものの、後半で私的領域における後退を余儀なくされるという対照が、美容整形という身体表象を通じ効果的に描かれている点においてである。ウルフの「美の神話」について吉澤夏子は、美を女性に不可欠なものとする言説は女性が解放されたかに見える現代社会においてこそ強化される、S・ファルーディ (Susan Faludi) の「バックラッシュ」そのものであると指摘したが (吉澤 1997, p.230)、ウェルドンの作品はそうした80年代の時代性を如実に表していると言えよう。

美容整形は「身体に対する現代的な姿勢における有力な力」になった (Gilman 1999, p.5) とされ、ともすれば解放の言説において論じられる風潮の中で、エリザベス・ハイケン (Elizabeth Haiken) はマイケル・ジャクソン (Michael Jackson) の例を引き合いに出しながら、整形の抱える問題を提起した (Haiken 1997, p.11)。自己の再創造の一手段としての整形という考え方に人々の感覚が余りに慣らされてしまっている現在、彼のように大幅に外見的修正を施していると考えられている例を通してしてしかこの問題は喚起できないためであるという。ウェルドンの作品が、他人と寸分違わぬ容姿を四肢を短縮してまで実現するという、現在の医療技術では実現不可能と思われる物語をファンタジーという形式で描くのも、そうしなければ提起できない美容整形の暴力的とも言える心身への作用を我々に突きつける意図から生まれたものと理解できよう。

整形手術を受けるという選択に否定的な見解を打ち出したモーガンは、しかしなお、「今日我々は牢獄として機能する人工的身体をもった新種の女性の怪物を作り出しているのか、それとも女性の美容整形は選択の解放的領域を表しているのか」(Morgan 2003, p.170) と問う。デイヴィスの論にも十分に表さ

れているように、整形によりもたらされる結果は両価値的なものとも言える。女性の生きた身体経験を否定することはできず、そこにエンパワメントの契機を見出すことも不可能ではないのかもしれない。この作品で挙げるとするなら、手術を通じ現代のテクノロジーを駆使した人工的な身体を実現させたという意味で、主人公の身体は自然な身体概念を内部崩壊させ、またポストモダンのアイデンティティを表すサイボーグとなる可能性を今後に示唆してもいよう。また作品前半の彼女の圧倒的な存在感をともなった肥満した身体を、その逸脱的性質において「力の源泉」(Sceats 2000, p.91)と捉えるならば、フィクションの女性主人公の造形としては稀有な例と見なすこともできるかもしれない。手術とダイエットにより彼女が作品後半には痩身となったことで、社会の支配的言説に再回収されたものとしてこの可能性には否定的な見解を導いたが、上のモーガンの問いは、美容整形がいつそう一般化すると考えられる今後も、なお繰り返されていくと考えられる。医療や科学技術の加速度的な進歩にともない、我々の身体を取り巻く環境は日々変化しつつある。美容整形がもたらすジェンダー規範の強化と攪乱性をめぐる状況にも、さらに新たな局面が立ち現れるのかもしれない。我々はこれからもこの問題を注視し、検討を重ねていく必要があるだろう。

(はなぶさ・みゆき／お茶の水女子大学人間文化研究科博士後期課程)

掲載決定日：2005（平成17）年12月12日

## 注

- 1 アメリカの美容整形の施術数は、80年、90年代を通じて増加の一途をたどっている。こうした傾向は「美容整形のグローバル化」の様相も見せており、例えばイギリスでもアメリカと同様の「『美容整形』文化」に移行することは明白とされる (Gilman 1999, pp.3-6, 32, 343-4)。またアメリカにおける美容外科産業の成長については、Wolf 2002, pp.17, 232 に触れられている。
- 2 アメリカにおける整形手術患者の男女比は、1988年までの段階で13対87、1996年時点では11対89と、いずれも圧倒的に女性の割合が勝っている (Wolf 2002, p.218; Gilman 1999, p.35)。身体変形が社会における権力との関係から特に女性に求められるようになった歴史的な経緯などについては、Davis 1995, p.39、Lakoff and Scherr 1984, p.160 参照。
- 3 デイヴィスが実地調査の対象としたのは審査を経て保険が適用されるような整形患者のケースであり、「ある状況下において」(Davis 1995, p.181)、「特定の女性には」(Davis 1995, p.5) 整形が最善の策であると言う際に想定している条件も再確認される必要があるだろう。
- 4 以下の本書からの引用文は邦訳書を用い、頁数のみを括弧内に記す。
- 5 自己決定、選択としての美容整形という考え方に対する同様の批判はボルドーにも共通する。彼女はシェール (Cher) の整形の例を挙げ、それが抵抗ではなく規範化であるにも拘らず創造的行為とすりかえるからくりがあり、また整形により術前の容姿が矯正されるべき欠点として構築されてしまう危険性もあることを指摘している (Bordo 1993a, p.19; 1993b, pp.196-7)。
- 6 またモーガンは美容整形 (“cosmetic surgery”) という言葉自体、一時的なものではなく永続的であり、長期にわたる苦痛をとまなうという点で、化粧とは似てあらざるものである事実を覆い隠していることも指摘している (Morgan 2003, p.174)。
- 7 この作品においてロマンス小説が女性の感情的な搾取の役割を果していることは、ピラー・ヒダルゴ (Pillar Hidalgo) にも述べられている。ロマンス小説では恋愛が女性の人生における最高の善として描かれ、その恋愛は身体的魅力を持つ者のものであるため、女性に美を強制することになるのだと言う (Hidalgo 1993, p.296)。
- 8 この作品が『人魚姫』と同様、『醜いアヒルの子』を下敷きにしていることは明白だが、美しい白鳥に変身する醜い

アヒルの子の妖精物語に対し、この作品が「残酷にも醜い女性の自己敗退」、「最終的には[男性支配の社会の価値を]内在化し、肉体的変身の陰惨なプロセスを遂げる」ものとする解釈は、ヒダルゴにも見られる (Hidalgo 1993, p. 295)。

- 9 こうした美容整形の興隆の背景に美容産業の戦略やメディアの影響があることはしばしば論じられるところである。ウルフは美容産業が美の指標を上げることで女性の自己認識を歪曲し、自己嫌悪を増大させ、感覚を麻痺させる、「脅しのメカニズム」を導入していることを指摘している (Wolf 2002, pp.232, 251)。またイメージの大量複写と拡散においてメディアが果たす役割や、コマーシャルリズムについては、Lakoff and Scherr 1984, 4章、Bordo 1993a, p.25 参照。

## 参考文献

- 小野俊太郎『ピグマリオン・コンプレックス——プリティ・ウーマンの系譜』ありな書房、1997年。
- 吉澤夏子『女であることの希望——ラディカル・フェミニズムの向こう側』、勁草書房、1997年。
- . 「美という評価基準——心の中の問題」 *Queer Japan*, vol. 3, 勁草書房、2000年。
- Bordo, Susan. “The Body and the Reproduction of Femininity: A Feminist Appropriation of Foucault.” In Alison M. Jaggar and Susan Bordo eds. *Gender / Body / Knowledge: Feminist Reconstructions of Being and Knowing*. New Jersey: Rutgers U. P., 1989, 13-33.
- . *Unbearable Weight: Feminism, Western Culture, and the Body*. Berkley: University of California Press, 1993a.
- . “Feminism, Foucault and the Politics of the Body.” In Caroline Ramazanoglu ed. *Up Against Foucault: Exploration of Some Tensions Between Foucault and Feminism*. London and New York: Routledge, 1993b. 179-202.
- Chapkis, Wendy. *Beauty Secrets: Women and the Politics of Appearance*. Boston: South End Press, 1986.
- Conde, Mary. “Fat Women and Food.” In Sue Vice, Matthew Campbell and Tim Armstrong eds. *Beyond the Pleasure Dome: Writing and Addiction from the Romantics*. Sheffield: Sheffield Academic Press, 1994. 124-131.
- Davis, Kathy, ed. *Reshaping the Female Body: The Dilemma of Cosmetic Surgery*. New York and London: Routledge, 1995.
- . *Embodied Practices: Feminist Perspectives on the Body*. London, California and New Delhi: Sage Publications, 1997.
- Diamond, Irene, and Lee Quinby, eds. *Feminism and Foucault: Reflections on Resistance*. Boston: Northeastern University Press, 1988.
- Evans, Mary. *Introducing Contemporary Feminist Thought*. Cambridge: Polity Press, 1997.
- Faulks, Lana. *Fay Weldon*. New York: Twayne Publishers, London: Prentice Hall International, 1998.
- Gilman, Sander L. *Making the Body Beautiful: A Cultural History of Aesthetic Surgery*. Princeton and Oxford: Princeton University Press, 1999.
- Haiken, Elizabeth. *Venus Envy: A History of Cosmetic Surgery*. Baltimore: The John Hopkins University Press, 1997. (エリザベス・ハイケン『プラスチック・ビューティ——美容整形の文化史』野中邦子訳、平凡社、1999年)。
- Hidalgo, Pilar. “The Female Body Politic: From Victimization to Empowerment.” In Robert Clark and Piero Boitani eds. *English Studies in Transition: Papers from the ESSE Inaugural Conference*. London and New York: Routledge, 1993. 289-305.
- Lakoff, Robin Tolmach, and Raquel L. Scherr. *Face Value: The Politics of Beauty*. Boston: Routledge and Kegan Paul, 1984. (ロビン・トルマック・ラクオフ、ラクエル・L・シエール『フェイス・ヴァリュー——美の政治学』南博訳、ポーラ文化研究所、1988年)。

- Morgan, Kathryn Paulty. "Women and the Knife: Cosmetic Surgery and the Colonization of Women's Bodies." In Rose Weitz ed. *The Politics of Women's Bodies: Sexuality, Appearance, and Behavior*. 2<sup>nd</sup> ed. Oxford: Oxford University Press, 2003. 164-183.
- Price, Janet, and Margrit Schildrick, eds. *Feminist Theory and the Body: A Reader*. New York: Routledge, 1999.
- Sceats, Sarah. *Food, Consumption and the Body in Contemporary Women's Fiction*. Cambridge: Cambridge University Press, 2000.
- Smith, Dorothy E. *Texts, Facts, and Femininity: Exploring the Relation of Ruling*. London and New York: Routledge, 1990.
- Smith, Juliana Patricia. "Women Like Us Must Learn to Stick Together: Lesbians in the Novels of Fay Weldon." In Abby H. P. Werlock ed. *British Women Writing Fiction*. Alabama: University of Alabama Press, 2000. 125-147.
- Waugh, Patricia. *Feminine Fiction: Revisiting the Postmodern*. New York: Routledge, 1989.
- Weldon, Fay. *The Life and Loves of a She-Devil*. New York: Ballantine Books, 1983. (フェイ・ウェルドン『魔女と呼ばれて』森沢麻里訳、集英社文庫、1993年)。
- Wolf, Naomi. *The Beauty Myth: How Images of Beauty Are Used Against Women*. New York: Harper Collins, 2002. orig. 1991. (『女たちの見えない敵 美の陰謀』曾田和子訳、ティビーエスブリタニカ、1994年)。
- Young, Iris Marion. *Justice and the Politics of Difference*. New Jersey: Princeton University Press, 1990a.
- . *Throwing Like a Girl and Other Essays in Feminist Philosophy and Social Theory*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1990b.